

# ホップ・ステップ



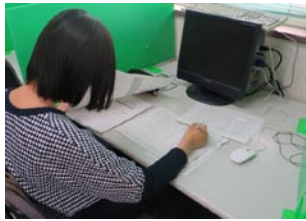
第115号  
2016年5月1日発行



4/2～4/3 16年度最初の道コン



道コンを見直す



道コンと学テを踏まえて面談



がんばる新中1



差入のシュークリーム



がんばってね！中3生



新高1の女子生徒



看護師志望の江南生、出来る限り塾に来てね！



大学受験まで8ヶ月の高3生



まず、何か食べてから勉強



12期生の大畑君の札幌での結婚式に出席する前に2期生の三つ石さん夫婦と昼食 久々に卒業生の結婚式に招待されました



就職内定の田村君 本当にピースだね 釧路町の消防士になった山角君 毎年、入試のときに差入してくれる市立看護師の18期生の佐藤さん



千歳空港のカウンターで勤務する14期生の工藤さん 忙しくて大変そうです 大畑君の姉で10期生の心理カウンセラーで作業療法士の大畑さん 6期生の中島君、入学式の後、公立大に勤務する奥さんと子供と 塾向かいのNTTのアパートがとうとう解体されることに



★道コン・学力テストを終えて★  
16年度がスタートして1ヶ月、塾での学力コンクールと学校での学力テストがありました。それぞれの学年の最初のテストなので点数はそれ程問題ではありません。大事なことはその結果を踏まえてこれからどう取り組んでいくのかを考え実行することです。

成績の良い人、成績の上がる人は次のような人たちです。まず一番大事なのは明確な目標を持つことです。目標なしに勉強してもなかなか結果を出すことは出来ません。それはスポーツも勉強も全く同じです。自分には無理とか、出来ないと思ってしまうのはそこから先へは進みません。解剖学者の養老孟司さんの著書に「バカの壁」があります。

人は、自分のいやな事、知りたくない事、興味のない事に対して、自ら壁を作るといふようなことが書かれています。当然そこから先へは進みませんが楽ですが、当然自分の持つ可能性を失ってしまします。自分に壁を作る人と作らずに挑戦する人では、人生に大きな差が出来ます。部活は一生懸命やって、勉強には自ら壁を作ってしまう事のないようにすることです。

二つ目は、とにかく素直であることです。成績の上昇がっていく人は、言われた事、指導された事を素直に実行します。

三つ目は、いつも言われている事で、コツコツ丁寧にやる事です。勉強する上で楽な方法はありませんから毎日、中学生は復習、高校生は予習をちゃんとする事です。特に、男子生徒は字が乱雑で、簡単

に済まそうとする傾向が見られます。結果としてミスが多くなり、やり直すという無駄なことをすることになります。

四つ目は注意力と意識です。とにかく社会全体の過保護の影響で、自ら考え、行動することが出来ていません。いついつ、自分が何をやるのか、何をしなければならぬのか、何が必要なかを考えていなかったり、覚えていないという事が目に付きます。これら四つのがしっかりと出来れば、成績が上がるという事は絶対にありません。

出来ないこと、出来なかったことが問題なのではなく、それにどう取り組んでいくか、どう挑戦するのかで大きく結果に違いが出来ます。これは勉強だけのことではありません。社会人になった時にこそ常に考えなければならぬことです。

★最速、4月14日に就職内定！★  
釧路高専機械工学科で5年生になったばかりの田村君がもう就職の内定をもらいました。

例年、高専生で早い人はゴールデンウィーク前後には決まっていますが、4月14日は驚きですね。

東証一部上場企業の株式会社キッツ「KITZ」は、世界有数の総合バルブメーカーで連結従業員数が4000を超える大企業です。

学科試験は無く、山梨県の工場と千葉の本社2ヶ所での面接試験だけだったそうです。

田村君の話だと「釧路から札幌まで自転車行ったこと」や休みの日には自転車で何十kmも走ったり、ずっと野球をやってきたことが評価されたようだと話していた。企業でも挑戦すること、続けることが評価されるという事の顕著な例です。おめでとう。

31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	
		休塾							休塾						第3回小・中・高漢字テスト(予定)	休塾						休塾				GW休み	GW休み	GW休み	GW休み(29日分の振替)	GW休み	GW休み

5月の予定



## 基礎学力テスト、高1～2で複数回 指導改善を早く

高校生の基礎学力の定着度を測るため2019年度に始める予定の高校基礎学力テスト（仮称）について、文部科学省が高校1、2年生の間に複数回受験できる案を検討していることが12日、分かった。

これまでは高校2、3年生の年2回受験を想定していた。テスト結果をより早く生徒の指導改善に生かすとともに、前倒しによって大学受験への影響を少なくする狙いがあるとみられる。

テストの難易度はコンピューターを使って答えるCBT方式の導入を前提に、複数のレベルを用意して学校や生徒が選べるようにすることを検討。中学校の内容の学び直しから発展的な問題まで段階を設け、より多くが受験しやすいテストにした考え。

具体的な制度設計を議論する同省の高大接続システム改革会議が15年9月に公表した「中間まとめ」は基礎学力テストについて、(1)高校2、3年に年2回ずつ受験(2)平均的か、課題がある学力層が対象——としていた。

その後の議論で委員から「生徒の指導にいかすなら1年から始めた方がいい」「進学校の生徒が受けるメリットがない」との意見が出ていた。

基礎学力テストは19年度から始める予定で、次期学習指導要領が導入される22年度までは試行期間とし、大学入試への活用は23年度以降としている。文科省は今日17日の同会議で素案を示す方針だ。

日経新聞電子版2月3日

## 高校基礎学力テスト、校内のパソコン使い受験 文科省検討

高校生の学力の定着度を測る目的で2019年度に導入される予定の「高校基礎学力テスト（仮称）」について、文部科学省は学校内にあるパソコンを使って受験する方法で行うことを目指している。テストの問題は複数の難易度を用意し、高校側が生徒の学力などを踏まえて選べるようにする。公平性の観点から大学入試への活用は当面見送られる方向だ。

高校に配備されているパソコンの台数は限りがあるため、テストは一斉受験ではなく、生徒が一定期間内で順に受けることを想定。主に高校が指導改善目的に使うことになり、小中学校で実施されている「全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）」の高校版という位置づけになりそうだ。

文科省の高大接続システム改革会議が示した「たたき台」によると、高校基礎学力テストは、パソコンを使って答えるCBT（Computer Based Testing）方式を前提に国語、数学、英語で行う。生徒が自分の弱点を理解して学習改善につなげられるよう1、2年生の受験を前提としている。

多様化する教育内容や学校行事に対応し、全生徒が同じ問題を解くのではなく、生徒や学校が複数の難易度の中から問題を選択したり、自由に受験時期を選べたりすることを目指す。

このため、問題を大量に蓄積する必要があり、文科省は高校の定期試験や教育委員会の独自テスト、民間の資格試験問題などを集めた「アイテムバンク」の設置を提案。問題作成や採点、結果の返却などの運営は民間委託も検討している。

文科省の14年度調査によると、全国の公立高校約3600校で生徒が使えるパソコンは約46万6千台。パソコンが足りないケースも出てくるとみられ、紙を使った受験方法も検討している。

文科省は16年度予算案で約1億円を計上し、モデル校でテスト導入に向けた実践研究を行う方針。担当者は「高校側の理解を得られ、生徒が受けたいと思えるようなテストになるよう制度設計を進めたい」と話している。

日経新聞電子版2月22日

## 英語力、高校は群馬、中学は千葉が1位

### 都道府県別データ公表 文科省調査

文部科学省は4日、平成27年度の英語教育実施状況を公表した。全国の公立高校と公立中学校の各3年生のうち、政府が掲げる目標レベルに達している生徒の割合が最も高かったのは、高校が群馬県の49.4%、中学校は千葉県の52.1%だった。生徒の英語力に関する都道府県別データの公表は初めて。文科省は「他県と比較して改善につなげてほしい」と話している。

文科省によると、政府目標では29年度までに、卒業段階で高校生が英検準2級以上相当、中学生が英検3級以上相当の英語力を、それぞれ全体の5割が身に付けるよう求めている。だが、調査結果では目標レベルを達成した生徒の割合は全国平均で、高校が34.3%（前年度31.9%）、中学が36.6%（同34.6%）にとどまった。

一方、政府は英語教員にも英検準1級以上か、それに相当する資格の取得を求めており、29年度までの目標の割合は高校が75%、中学は50%だが、今回の調査では高校が57.3%（同55.4%）、中学は30.2%（同28.8%）だった。

初めて公表された都道府県別データで、目標をクリアした生徒数の割合が高かったのは、高校では群馬に続き千葉が45.5%▽福井42.5%。中学ではトップの千葉に、秋田48.6%▽東京47.9%が続いた。

上位県で共通しているのは、授業が英語で行われているケースが多かったり、生徒が身に付けるべき能力を段階別に明示した指標の利用が進んでいたりするという。中高ともに好成績だった千葉県では、27年度から英検より試験時間が短い「**英検IBA**」の全校受験を導入。県教委は「生徒はIBAを通じて自らの英語レベルを把握することができ、さらに上を目指そうという勉強への動機付けにもつながっている」と話す。

ただ、政府目標をクリアした生徒の割合には、英検取得者だけでなく、授業の様子や学校の試験結果などで教員が独自に英検取得者に相当すると判断した生徒数も含まれ、文科省は「客観性については批判もあるが、公表の効果を優先させたい」と話している。

**16年度から釧路市採用の中1の英語の教科書ワン・ワールドは、読む・書く・聞く・話すの4技能をとても意識した教科書だ。おそらく、この教科書で英語をやる生徒は英語の出来ない生徒が多くなるだろう。とにかく文法表現と会話表現とがごちゃ混ぜ。そして文末に？をつけただけの疑問文が出てくる。生徒は当然、簡単な方を覚えるから、英語力は身につかない。会話と文法とは全く別物で、公教育で本当にやりたいのはどっちなのか。入試の英語をどうするのかをはっきりさせることだ！**

## 2020年度からの小学校英語

### 増加分は朝や土曜日、夏・冬休みに！？

小学校の新5年生は、必修の「外国語活動」が始まったことと思います。文部科学省は2020（平成32）年度から、これを中学年（3・4年生）に前倒しするとともに、高学年は教科に格上げすることにしています。そこで問題となるのは、必要な授業時間数の増加分を、どうするかです。次の学習指導要領を検討している中央教育審議会の部会は、10～15分の「短時間学習」（モジュール学習・帯学習）を導入したり、土曜日や夏・冬休み、学年末などに集中して実施したりする案をまとめました。なぜ、こんな案になったのでしょうか。

現在の外国語活動は、「聞く」「話す」の音声を中心で、年間35時間を標準としています。週当たり1コマ分に当たります。文科省は、グローバル化に対応した「使える英語」を目指して、小学校から教科化するなどの方針を、既に決めています。しかし、小学校高学年で「読む」「書く」を含めた4技能をバランスよく実施するには、1コマ分増の年間70時間が必要になるといいます。中学年でも、新たに週1コマ分を割かなければなりません。

現在、指導要領に示された標準授業時間数をこなすため、ほとんどの学校では、週28コマの授業が行われています。コマ数を増やすには、5時間授業の日を6時間までやればよいわけですが、それでは児童会活動やクラブ活動、補充指導などの時間がなくなってしまいます。中教審でも「週28コマが限度」としています。それなら英語以外の授業時間数を減らせばよいわけですが、昨年8月の「論点整理」では、各教科などの学習内容は減らさないと早々に宣言しており、ましてやコマ数の削減は難しそうです。

そこで出てきたのが、冒頭のような案です。ただ、全国一律の実施を求めるのではなく、45分プラス15分で60分授業にするなど、地域や学校の実情に応じて実施してもらうことにしました。しかし、これまで朝学習や朝読書の取り組みをしている学校は、その時間を英語に譲らなければならなくなるかもしれません。それでも高学年は1コマ分が確保されているので、1コマの授業プラス会話などの習熟のための短時間学習……といった活用方法が可能ですが、そもそも中学年は、週1コマの確保すら困難です。

もちろん現在でも、特例の活用やさまざまな工夫などで、小学校低学年から外国語活動を実施したり、標準時間数を上回る授業を実施したりしている小学校は少なくありません。そのため、どの学校でも時間数を生み出すために苦労するとは限りません。

忘れてはいけないのは、どんな授業形態であれ、将来に必要な英語によるコミュニケーション能力の素地を、子どもたちに着実に付けさせ、中学校以降の学習につなげることです。ましてや土曜日や夏・冬休みなどの活用となれば、子どもへの負担も心配です。保護者としても、学校側の考え方をじっくり聞き、納得したうえで、協力していく必要が出てきそうです。 渡辺敦司 Benesse教育情報サイトより